

残りの50%

坂戸市議会議員 武井 誠

5周年集会、「あじさいの会」の紙芝居は感動的だった。戦災孤児の姉弟の暮らし、村から出征した若者の多くが戦死してもどらなかったことなどが語られ、戦争のつらさ、悲しさを再認識した。話は変わるが、NHK朝ドラ「おひさま」が好評。ここでも多くの戦争に関わる出来事がていねいに取り上げられていた。出征する兵士と家族、恋人の想い、戦闘、空襲、爆撃による死、軍国主義教育、食糧難・・・私たちは、こういった話を、しっかり受けとめ、体験者の「戦争は嫌だ」という思いを受け継ぎ、次の世代に伝えていかななくてはならない。

ただし、これらのエピソードで、戦争のすべてが語られているわけではない。最大でも半分。残る半分は、戦争の「加害」の側面だ。出征兵士は、人を殺しに行ったのだ。欧米支配からの解放の名のもとに、朝鮮、中国をはじめとするアジアの人々に対して日本軍が行った虐殺行為、殺された人たちと家族・恋人たちの無念さ、そこに思いを致さない限り、「厭戦」は「反戦」とはならない。

しかし、それがドラマやドキュメンタリーで取り上げられることは、極めて少ない。その意味を私たちは考えなければならない。私の友人永田浩三さんは、自らがプロデュースした「従軍慰安婦」をめぐる番組に対する自民党からの圧力を公にしたため、NHKを退職せざるをえなくなった。

「軍隊は国家権力を守るものであって国民は守らない」「侵略で金もうけや権力を拡大しようとする人たちが戦争を起こし、金や権力を持たない人たちが、誤った教育と誤った情報に操作されて殺し合う」…そういう戦争の全体像が明らかになることを快く思わない人たちがいるということだ。それが憲法9条を変えようとしている人たちだと思う。

いわゆる墨ぬり教科書ほど露骨ではないが、ソフトな軍国主義とでも言うべき危険な教科書が2種、採択の候補として登場している。育鵬社と自由社の教科書だ。展示会に行った。一見、体裁は普通の教科書だが内容はひどい。説明する字数がないが、みんなで採択反対の声を挙げていきたい。

ドイツの平和教育はアウシュビッツから始まる。もちろんヒロシマ、ナガサキ、東京大空襲に学ぶことも重要だが、オキナワ、そしてナンキンに学ぶことも忘れてはならない。子どもたちや孫たちを、再び戦場に送らないために。

補足 原発の事故処理に、インドネシアなど海外からの研修生を使う計画があると知った。「加害」は今も続いている。